

福岡市科学館 第18回 サイエンスコミュニケーション開発会議		作成日:2023年1月25日(水)
月日: 2023年1月25日(水)	時間: 13:00~16:00	場所: 福岡市科学館 6階サイエンスホール

出席者:	久留米工業大学 副学長 <input type="checkbox"/> 麻生		
	福岡市小学校理科研究会 <input checked="" type="checkbox"/> 荒木		
	西日本新聞社 取締役 メディア戦略局長 <input checked="" type="checkbox"/> 大久保		
	YESAND 代表 <input checked="" type="checkbox"/> 高宮		
	日本サイエンスコミュニケーション協会 理事 <input checked="" type="checkbox"/> 高安(リモート)(議長)		
	九州大学大学院 芸術工学研究院 教授 <input type="checkbox"/> 平井		
	日本ボーイスカウト福岡県連盟 理事長 <input type="checkbox"/> 井手		
	株式会社HUMIコンサルティング 代表取締役 <input checked="" type="checkbox"/> 中村		
	株式会社トータルメディア開発研究所 取締役 <input checked="" type="checkbox"/> 佐藤		
	福岡市科学館 館長 <input checked="" type="checkbox"/> 矢原		
	福岡市子ども未来局こども部 <input type="checkbox"/> 氷室	<input type="checkbox"/> 香月	<input type="checkbox"/> 興枿
	TM <input checked="" type="checkbox"/> 吉武	<input checked="" type="checkbox"/> 上田	<input checked="" type="checkbox"/> 高山
	科学館スタッフ <input checked="" type="checkbox"/> 田中	<input checked="" type="checkbox"/> 井上	<input checked="" type="checkbox"/> 藤瀬 <input checked="" type="checkbox"/> 米村
	<input checked="" type="checkbox"/> 板垣	<input checked="" type="checkbox"/> 藤本	<input checked="" type="checkbox"/> 穴澤 <input checked="" type="checkbox"/> 日下部(司会、記)

(敬称略)

配付資料:

- ・次第
- ・資料1 前回議事録
- ・資料2 第3四半期までの運営状況報告
- ・資料3 分科会の進捗状況報告

■議事内容(概要)	発言
●第1部 1. 福岡市科学館館長 挨拶	矢原
2. 前回のふりかえり(資料1)	日下部
3. 第3四半期までの福岡市科学館の運営状況報告(資料2) 管理運営責任者 吉武から説明。 ・利用者数は、計画値に対して106.8%と少し上回っている。 ・今年度夏場は、新型コロナウイルス感染症第7波の影響で利用者数の計画値よりも下回ったが、秋からのティラノサウルス展で盛り返した。 ・10月1日に開館5周年を迎え、式典を行った。当初の計画よりも早いペースで400万人を達成する見込み。 ・11月1日より、新型コロナウイルス感染症対策による短縮開館(9:30~18:00)から、通常の開館時間(9:30~21:30)に戻した。 マスク着用や手指消毒等、国や市の指針に従いながら安全最優先で運営をしている。 ・ヒーキ展や開館5周年記念ポスター展、ティラノサウルス展等を開催した。 ・ドームシアターは、開館時間を通常に戻したことにより、段階的に1日の放映回数をコロナ前に戻した。 ライブや講演会等のイベントも計画通り実施している。 ・科学実験やものづくりプログラムは、引き続き定員数を5組に制限して実施。 ジュニア科学者養成講座(ダーウィン・ニュートンコース)、SDGs家族会議、未来研究室等のセミナー講座は、オンラインとリアル(来館)のハイブリット開催で実施している。クラブ活動は、8クラブが月2回のペースで活動している。	吉武
4. 分科会の進捗状況報告(資料3) ＜第一分科会＞ 福岡市科学館における多様な学習プログラムの展開一 ・昨年度までの第一分科会と第四分科会の取組みおよび検討事項をさらに発展させ、館外でのプログラム開発に取り組んできた。 ・5年後は、知識伝達型に限らず課題解決型等の多様なプログラムのラインナップを揃えることを目指している。 ・今年度は、【対話・交流・課題解決型プログラム】の開発に求められるものと、出前授業用課題解決型プログラムの具体案の検討をした。 また、データ分析と蓄積については項目の検討を行った。 ・第1回分科会では、5年計画や目的の再確認を行ったりプログラムの実施方法の検討を行い、第2回分科会でプログラムの具体案を協議した結果、今年度は、開発プログラムのねらいと具体案の作成を行うことができた。	田中
(ねらい) ・「主体的・対話的で深い学び」ができる →自らの意思で進路を選択し、社会を生き抜くための資質・能力を持つ児童・学生の育成が求められているため。 ・「考える」「行動する」を体験できる →国立科学博物館の新しい「ミュージアムにおける学習段階別体系における学習プログラム分類」に基づく当館では「感じる」「知る」を体験するものが多く、「考える」「行動する」を体験するものが少なかったため。知識伝達型ではなく対話型・課題解決型の開発を目指す。 ・クリエイティブ「表現」を取り入れる →福岡市科学館のコンセプトを取り入れ、福岡市科学館らしさにつなげるため。	
(具体案) テーマ:もっと強い電磁石をつくろう 実施時間:90分(45分×2コマ) 対象:小学5年生 人数:35名程度(1クラス) 流れ:①[理科]電磁石のおさらい ②[課題解決]強くするには? ③[課題解決]2つを組み合わせると強い電磁石を作ろう ④[表現]電磁石を使った便利道具のデザインを考えて発表しよう	
・プログラムのシナリオは、まず電磁石のおさらいを行う。(①)電磁石を強くするためのアイデアを出してもらい、班ごとに3つアイデアを選び1つずつ実験を行ってもらおう。(②)さらにその3つの中から、2つを選び組み合わせ、強い磁石を作ってもらおう。(③)休憩を挟み、表現の時間に入る。児童に沢山の討論をしてもらうために、まずは個人で便利道具のデザインアイデアを出し班で共有。投票で班のデザインアイデアを決定し、最後に発表を行う。(④)	

## <第二分科会> 一自発的学びが生まれる科学情報の提供一

- 5年後の成果「常に科学に関する最新の情報が発信され、利用者自ら科学を楽しめるようナビゲートするハブ機能を実現する」を念頭に置き、今年度は基本展示室のリニューアルに併せてサイエンスナビシステムのコンテンツをブラッシュアップするという目標を設定し、協議を進めてきた。
- 第1回分科会では、NPO連想出版と協議を行い、基本展示室のリニューアル時期に合わせて、サイエンスナビシステムのコンテンツの入れ替えと内容の更新を進めていくこととなり、早速取り掛かった。
- 委員より、来館者を促進するためのターゲットや、「人が育つ」とはどのようなことか、スタッフが目指すサイエンスナビとは何かを考えながら、5年後の指針を明確にすることが重要ではないかと意見があり、サイエンスナビのスタッフで協議し指針を設定した。  
(指針)  
「サイエンスナビには科学について心くすぐるフックとなるコンテンツがあり、それをさらに広げたり深めたりできる情報を提供していく空間」この指針を基に、「空間」「発信」「科学への興味心」の3つの検討事項を設定した。
- 第2回分科会では、上記3つの検討事項を軸に、サイエンスナビが好奇心をくすぐる場所であり続けるために何をすべきか具体案を出し合った。  
(具体案)  
・ジュニア科学者養成講座の成果をサイエンスナビで紹介する等、参加者だけではなく来館者へ向けて知識より好奇心の大切さを伝えることができる仕掛けづくりを行う。小学生の参加者が中高生になってからも当館と接点をもてるようにする。  
・質の高いサイエンスカフェや身近な自然を感じるフィールドワークで、大人も一緒に楽しめるようなイベントを実施する。  
・福岡市科学館の取り組みをアーカイブしコンテンツ化する。  
・アクティビティ終了後も興味を持ち続けてもらう仕掛けづくりとして、プロセスの可視化を行う。  
→今年度のサイエンススポットまち歩きワンアップ～福岡空港編～(3回連続講座)での成果物を、ヒコーキ展会場内とサイエンスナビで掲示を行い、非常に良い反響があった。デジタルコンテンツでの情報発信だけではなく掲示での発信も効果があることがわかった。
- 5年後の成果に向けて、来年度は「スタッフの向上」「サイエンスナビの取り組み」「福岡市科学館のアクティビティの取り組み」の3つの検討事項の実現化を行いたい。

## <第三分科会> 一福岡市科学館の新たな機能とブランディングの確立一

- 当初の今年度の目標は、科学館を取り巻く環境とコロナ禍におけるニーズの変容を調査し、今あるコンセプトの理解を深め、時代に即した「主要事業の具現化を図る方策を提案する」としていたが、協議を進める中で「科学館機能の整理と焦点化の議論を深める」ということに重点をおいた。
- 第1回分科会では、開館からこれまでどんな事業を実施してきたのか、スタッフは何を大切に思っているのか、スタッフアンケートを実施することになった。アンケートの結果、コンセプトへの共感半数以上あったが誰にとってもわかりやすいかという部分は半数を下回った。この結果を受けて、委員より「科学館のうり、柱」を具体的に決めた方が良く、クリエイティブは福岡市科学館らしさ、市民参画性の視点が抜け落ちているのではないかと意見があった。
- 第2回分科会では、今年度の調査の進め方や方向性について協議を行った。10年先を見ながら5年先までのビジョンを考えたらよいのではないかと、世界の先端を行く科学館が見本になるかということ、世界や日本の他館が今のような状況か調査を行うこととした。他館へのアンケート調査は行っていないが、福岡市がどのような方向性であるか、世界や日本、政令指定都市のトレンドをスタッフで調査し情報をまとめた。
- 第3回分科会では、調査結果を基に福岡市科学館の柱を議論し、キーワードとしてDX化・市民参画・防災・インバウンド、トレンドとして気候変動・ウェルビーイング・ユニバーサルデザイン・STEAM教育が挙げられた。たくさんの事例から当館はどこを真似するのか、どこが足りないと感じるのか、何をを目指すのか、スタッフ目線で仮説を立てる必要があるということ、機能のレベルで当館の柱を分科会事務局で話し合った。
- 第4回分科会では、これまでの協議内容をまとめる会とした。「九州地区の中核科学館への期待」、「空間利用と感染症対策・事業の焦点化」、「地域社会の教育環境の変化」、「国際的・地球規模の視点からの活動や情報発信」、「持続可能な社会の担い手育成」の5つが当館が求められる機能であり、今後当館が目指すべき姿は、「科学と感性の交流拠点となる」「時代や環境の変化に対応し日々進化し続ける」「福岡から持続可能な社会の担い手が育つ」「国際的かつ地球規模の視点から未来を創造する」「地域社会の教育環境の変化に対応する」「生活から人類・宇宙までの「総合的な知」を育む」であるとまとめた。
- 委員からは、他館では実施していないような様々な事業を行っていることについて高い評価をいただいた。
- 国内の科学館活動は、新しい博物館法からの要件「(地域の)文化形成機能」を重視しており、世界の科学館活動は、様々な立場の方々の参加を高める方策(包摂:インクルージョン)を重視している国が多いと話が合った。
- 外部評価委員会でも、当館で行っている取り組みの配信や成果を伝えていくことをもっと行った方が良いのではと意見はあったものの、福岡市科学館らしい事業に取り組んでいると高く評価していただいた。
- 福岡市科学館に求めるブランド(案)
  - 1) 科学と感性の交流拠点であること
  - 2) 時代や環境および地域社会の教育環境の変化に対応し日々進化し続けること
  - 3) 生活から人類・宇宙までの「総合的な知」を育み、福岡から持続可能な社会の担い手が育つ支援をする場所であること
  - 4) 国際的かつ地球規模の視点から未来を創造することができるプログラムを開発すること
- 今年度は分科会でのみの協議だったため、今後はスタッフに意見を聞いたり還元をするインナーブランディングにあと1年はかけたい。その後3年をかけて、全スタッフで共通認識を持ち行動することでアウトプロモーションを進めるという5カ年計画を立てた。

## 5. 質疑応答

- 第二分科会の報告について、科学館全体の幅広い科学情報提供の検討会と考えていた。サイエンスナビがその中核となるのは間違いないが、サイエンスナビコーナー以外も視野に入れた検討はどの程度行われたか。  
高安
- 館内の様々なアクティビティを通して提供されている情報をどのようにアーカイブしコンテンツ化するか、さらにそのコンテンツ化したものをWEBサイトまたはYouTubeを通して公開するのか、マスコミと一緒に発信するのかという議論は行った。そのハブ的な機能として、サイエンスナビという場所・スタッフがどういう形で科学館事業の情報を集約し発信ができるか、さわりの議論に留まりはしたが、サイエンスナビだけの小さな枠での考えにはなっていないかと思う。サイエンスナビスタッフが担当していないアクティビティについても、参加者だけではなく広く色々な方に知っていただくための機会をどう設定するか等の議論も行った。  
中村
- 様々な学会に参加していると、福岡市科学館が高く評価されている実感がある。福岡市科学館のプログラムの内容を知りたいという他館からの要望が多々ある。事業内容の提供や科学コンテンツの情報提供もぜひ行ってほしいという声もよく聞かれる。科学館ネットワークという構想があるが、科学館と利用者との関係性という面のみではなく、科学業界・研究者への情報提供という点も視野に入れて検討を進めていただきたい。  
高安
- 来館した際はサイエンスナビで利用者の様子を観察しているが、非常に活発な場所だと感じる。メインのサイエンスナビシステムは非常に高度なシステムだと思うが、利用者数に対する費用対効果はどのくらいあるのか。また、利用者を絞ることは必要かもしれないが、今後自宅等の館外で、科学館の情報システムを使用するのにできる可能性はあるのか。  
高安

<ul style="list-style-type: none"> <li>2017年～2021年までのサイエンスナビの利用者数とサイエンスナビシステムの経費から算出すると、1回あたり35円/人。この金額が利用者にとって高い/安いかわからないが、サイエンスナビは無料で入れるという点からすると高い/安いに関わらずたくさんの来館者に利用してもらいたいと思っている。</li> </ul>	藤瀬
<ul style="list-style-type: none"> <li>一般的な博物館の運営費用を利用者数で割ると1日1,000円～数千円/人。科学館を運営する立場からすると、非常に安いと思う。やはりサイエンスナビシステムの館外での利用は難しいということか。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>サイエンスナビシステムの開発から携わっているが、多くの方に使っていただけて大変ありがたい。5年前にシステムを開発した際は、コンテンツそのものが高かったり、今のように無料コンテンツが多くなかった。コロナ禍で月額・定額サービスが増え、ナショナルジオグラフィック等もバックナンバーが読めるようになったり、コンテンツが安価に容易に手に入るようになってきている。そういった定額性サービスや無償で良質な情報を提供しているようなサービスと連携して、館外からもアクセスできるような形には少しずつたがえてきていると見込んでいる。</li> </ul>	中村
<ul style="list-style-type: none"> <li>ただし、サイエンスナビで人気の小学館の図鑑やニュートンは、デジタル化が進んでいない背景もあり、そういったものの提供は難しい。中身全体を見せるのではなく、どこにどういった情報が掲載されているかディスカバーサービスレベルの情報提供であればと思う。</li> </ul>	中村
<ul style="list-style-type: none"> <li>第二分科会の方向性について、単に知識の切り売りではなく学ぶ姿勢・疑問を生じさせるような科学情報の提供と事務局より報告があったが、先日1/21に開催された福岡市科学館矢原館長とIT生命誌研究館永田館長の館長対談で提案されていた「学問の問う」重要性について、科学館は考える姿勢を提供していくべきではないかという内容にも沿った計画になっていたと思う。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>第一分科会について、館の内外での多様な学習プログラムの検討だが、今年は館外での試行的なプログラムを検討していると理解している。現状の館内のプログラムは、どのくらいが交流的または課題解決型のプログラムになっていると思うか。また、その改善が必要なものの緊急度はどうか。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>全体は把握しきれていないが、現状は課題解決型プログラムは、ジュニア科学者養成講座のダーウィンコースやニュートンコース、昨年実施したS+Cチャレンジプログラム虹づくりに挑戦！くらいで恐らく全体の1割程度かと思う。</li> </ul>	井上
<ul style="list-style-type: none"> <li>対話が必要となると、プログラム自体が長時間になったり、開発にも多くの準備が必要だったり、さらに参加者が多くなると高いコストパフォーマンスが見込めなくなることになると思うが、それでも今後館内で課題解決型のプログラムを増やした方がいいという検討結果なのか。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>課題解決型のプログラムはまだ実施回数が少なく、体験できる参加者数も少ないが、当館にはジュニア科学者養成講座という素晴らしいプログラムがあるため、そのレベルまではいかづとも課題解決型の要素を体験できるプログラムの準備が必要ではないかということになった。</li> </ul>	田中
<ul style="list-style-type: none"> <li>このような協議の中では「デザイン思考」という言葉がよく出てくるが、教育プログラムの中ではどんなことを指しているか説明してもらえないか。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年度までの第四分科会で、デザイン思考のプログラムを開発した。大きくいうと「課題を解決するための思考プロセス」のようなもので、まず仮説を立てアイデアを出し、プロトタイプを作りそれを試す、そしてもう一度考え仮説を立て…を何度も繰り返していくことが、デザイン思考である。これには課題を解決することだけではなく、課題解決を自分事として捉えアイデアを出していくプロセスも含まれる。</li> </ul>	井上
<ul style="list-style-type: none"> <li>ジュニア科学者養成講座は、このデザイン思考に基づく方法論で実施されていると考えてよいか。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>その通り。</li> </ul>	井上
<ul style="list-style-type: none"> <li>今後福岡市科学館として、このデザイン思考の大切さをプログラム開発や展開の際に重視していこうという結論でよいか。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>私が考えるデザイン思考は、企業サイドが一遍に完成させた商品を売り出し、そして失敗するということが多々あるので、そうではなくプロトタイプを作ってユーザーと一緒に考えながら商品開発を行おうとする考え方であり、企業サイドでかなり注目された歴史がある。一方で、平井委員が専門とされているデザイン思考は、もっとデザイン寄りでは表現を重視した考え方だと思う。ジュニア科学者養成講座では、平井委員に協力を乞いながら表現の時間を多く取り込んでいる。大人でも予備知識がないと難しいテーマを取り上げているので大人のような理解を子どもに求めるのは無理だと思ったが、子どもなりにわかったという気持ち(自分が持っている知識と外から入ってきた知識がうまく結びついた感動)になってほしいので、平井委員のデザイン思考・表現を用い、子供たちなりにわかったことを漫画でも物語でもどのような形ででもいいので人に説明できるように表現するという取り組みを行っている。その取り組みを通じて感じたのは、子どもたちのクリエイティブ性の高さ。先日のニュートンコースで、DNAの情報をRNAが読み取りアミノ酸を繋いでいくプロセスを表現してもらったところ、ビーズや磁石を使ったり様々な道具を使って表現し、教材としても使えるような非常にわかりやすい学習プログラムができた。これまでは、福岡市科学館の活動を通じて子ども達の好奇心を引き出す・疑問を育てるという育てるという視点でできたが、これからは子どもたちの主体性をもっと尊重して、子どもたちなりに創造性を発揮するプロセスを大事にした方がいいのではないかと最近感じている。福岡市科学館のコンセプトはS+C(サイエンス&amp;クリエイティブ)だが、最近はクリエイティブ&amp;デザインがしっくりくる。子ども達の創造する力を活かし何か作品を作ってもらい、サイエンスナビ等で解説付きで飾ってあげることで、作った子ども達の満足度も上がり、それを見た来館者の学びにも繋がると思う。</li> </ul>	矢原
<ul style="list-style-type: none"> <li>第一分科会の検討内容は、具体的な案も含まれていて非常に興味深かった。プログラムの流れについて、その電磁石をなぜ強くした方がいいのか、なぜその必要があるのか等の社会の困りごとのような前段を入れてはどうか。仕事柄社会の困りごとの解決方法がないか調べていくことから、子どもたちの社会性の育成に貢献する視点があるとより面白いと思った。</li> </ul>	久保
<ul style="list-style-type: none"> <li>たしかに予め参加者に科学的な課題を与えて解決方法を探る流れが多いが、参加者自身に社会や自身の困りごと等からまず課題を考えてもらうことから始めるのはどうかということか。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>実際の運用では、課題を発見するところから行うとさらに時間がかかってしまうので、そこは説明でもよいと思う。シチュエーションを設けてあげるだけで、子ども達はこういふときにこんな事を考えたらしいんだなという気づきに繋がると思う。</li> </ul>	久保
<ul style="list-style-type: none"> <li>高校物理の重力加速度測定の授業を例にするとその測定をなぜしなければならないのか、課題を発見するところから実験を進められると良いとはよく言われるものの、中々時間がないためやっていないところが多いと思う。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>福岡市科学館の様々なプログラムは、第三分科会のブランディングの検討にかなり関係があると思うが質問や意見はあるか。</li> </ul>	高安
<ul style="list-style-type: none"> <li>科学館内外にどういった内容を発信していくかということが非常に整理できていて大変興味深い。ただしブランドという点、今後福岡市科学館が市民や科学界にどういふ存在として、認知・共感されるかということではないかと思う。ブランド(案)と言われると、福岡市科学館に来ると最新の科学が常に感じられる空間だったり、学校では学びきれなかったよりグローバルスタンダードな科学知識が身に付く等、科学館に共感してもらえるような文章・スタンスでロジックを考えた方がより良くなるのではと率直に感じた。ブランド(案)の内容は非常にまとまっていると思うので、福岡市科学館はこんな場所ですよとアピールできるような形に今後整理すると良いと思う。</li> </ul>	中村

- ・前回の本会議ではマーケティングを行う話が出ていたが、市場調査のようなものは来年度行う予定か。
- ・アンケート調査を増やす等、利用者調査を行いデジタル化して効率よくまとめられるように進めている。今年度後期より、デジタルマーケティングという部署を作った。まだ人員が少ないため本格的には動いていないが、Googleの機能を使ってどのような方が興味を持ち、どのようなイベントにアクセス数が多いのか等、数字を出すことが可能になっている。これまでアンケートの集計や分析まで行きていかなかったものを、少しずつできる範囲で数値化し蓄積し、今後の活動に繋げる予定。
- ・DX化とあるが、1980年度頃から「Wired Museum」(外から博物館のデータにアクセスできる)という新しい博物館のあり方がアメリカで提案されてきたが、例えばメタバースミュージアムのような、科学館そのものをデジタル化したコーナーが福岡市科学館にもあった方がよいという検討はあったか。
- ・具体的な検討はなかった。
- ・国際プラネタリウム協会の会議開催地として、タイやアメリカと並び選考に残っている福岡だが、福岡市で行ったプレゼンテーションの中で福岡市の魅力が今一つ伝わっていないと感じた。世界各国の都市公園を見てきたが、大濠公園は世界最高水準の都市公園だと思う。大きな都市の中に綺麗な水面があり、遊歩道も整備され、森もあり野鳥も観察しやすい、在来タンポポも残っていて植物も豊か、非常に安全で様々な形で市民に利用されている公園は中々ない。ジュニア科学者養成講座ダーウィンコースでは、子ども達に大濠公園の魅力を考えてもらい、強み・弱みを分析し、どんな改善ができるかまとめてもらったところ、非常によい内容だったので論文にまとめた。大濠公園の魅力とタイアップしていくことは福岡市科学館の強みになると思う。
- ・ブランド(案)の4) 国際的かつ地球規模の視点から未来を創造することができるプログラムを開発することについて、とても良いと思う。2010年にCOP10(生物多様性条約締結国会議)で愛知目標が作られた。その際に日本が、国立公園だけで生物を守ることはできないため日本にある里山のように地域の人が利用しながら守っていくことを国際的に発信した。愛知で誕生した、その他の効果的な地域をベースとする手段「OECM (Other Effective area-based Conservation Measures)」という考えが今回のCOPの国際目標の中で非常に重視され、2030年までに世界の陸地・海域の30%を保護された場所にしようと言われた。国立公園だけではなく、OECMに相当する新しい制度として自然共生エリアを募集し登録を増やすことでこの30%を達成しようとしている。大濠公園はその自然共生エリアの非常に有力な候補地の一つであるので、例えば福岡市科学館に来る子ども達や市民へはたらきかけて連携しながらOECMの登録地にしていく等、利用者参加型で国際プログラムに繋がることや自分たちで作出しながら参加することは福岡市科学館のブランドとして国際的かつ地球規模の視点から未来を創造するという方向性でとても良いと思う。そういった点で大濠公園や舞鶴公園は、ブランドのseeds(種)になると思う。
- ・DX化について、福岡市科学館のデジタル化は日々考えている。2年前よりグラバー展やヒコキ展等福岡市科学館オリジナルの企画展を作っている。それらを記録に残すことで有料コンテンツ化やDX化に繋がられるのではと思っている。ジュニア科学者養成講座を始め、福岡市科学館でしかできないことを福岡市科学館に来れない方々に提供できないか、そしてそれらが福岡市科学館のブランドやマーケティングに繋がられないかと考えている。

高安  
高山  
高安  
板垣  
矢原  
矢原  
上田

<休憩> 15分

●第2部  
6. 協議:各分科会について 60分

7. 報告:協議の内容について  
今回の協議内容を報告。

<第一分科会> ー福岡市科学館における多様な学習プログラムの展開ー

- ・前半で大久保委員よりご助言いただいたストーリー付け(導入)を、これから実施する出前授業にどのように反映させるか検討した。
- ・実験の情報共有方法としてワークシートを用い、それを掲示することで他の班の意見の共有を行う。
- ・実施時間90分(45分×2回)で考えていたが、課題を解決するためのアイデアを出す時間をじっくり設けるために複数日での実施案が挙がった。1日目[理科]、3日目[表現]等と時間を空けることで、児童が自宅でもアイデアを練ったり会話をしたりすることができるため、余白時間の重要性にも目を向けていきたい。
- ・データ蓄積のためのアンケート内容を検討を進めた。
- ・来年度を見据え、アウトリーチ活動のプログラム開発に向けての意見出しを行い、日常に結び付けたテーマとして火起こしの案が挙がった。

田中

<第二分科会> ー自発的学びが生まれる科学情報の提供ー

- ・福岡市科学館ならではのアーカイブをどうするか協議を行った。福岡市科学館のアーカイブというよりも、福岡ならではのコンテンツや福岡ならではの文化や歴史等、地域に重点を置いたアーカイブが大切ではないか、科学情報を地域と繋げることで活性化されるのではないかと意見が挙がった。
- ・サイエンスナビとしてどのようなアーカイブの作り方がいいのか検討し、現在あるものへの情報追加ではなく、自分たちが利用者に発信していきたいものを作り出すことにした。まだ具体的な案は出ていないが、福岡市科学館でのアクティビティを郷土カスタマイズしていくことが、一番福岡市科学館らしくアーカイブ化できるのではないかと話しがまとまった。
- ・例えば会議前半で矢原委員が仰っていた大濠公園の魅力等、福岡市科学館だからこそ発信する価値があるコンテンツを優先的にアーカイブ化するように、優先順位をつけながら、科学情報の発信の具体的な案を挙げていこうという話になった。第三分科会と絡むかもしれないが、地域や地域企業、市民との連携の部分が開館からの5年間で蓄積されてきて非常によいと思う。そのような福岡市科学館らしいブランドと合わせてコンテンツも発信できたらという話になった。

藤瀬  
中村

<第三分科会> ー福岡市科学館の新たな機能とブランディングの確立ー

- ・会議前半での第一分科会や第二分科会の話を受けて、全体を通して福岡市科学館ならではの科学館らしさが定まってきたという話になった。また、第三分科会で検討してきたブランド(案)に対してのご意見をいただいた通り、市民目線や寄り添う部分、福岡でしかできない福岡らしさもこのブランド(案)に加えていかなければならないとの話しもあった。
- ・乳幼児や妊婦対象のドームシアタープログラムや、年配の方も学べる・問いを持ってもらえるプログラムを作るのがよいのではという意見が挙がった。ただし、それらを無料で行うとなると持続の可能性が低くなるため、有料化の必要性も考えている。
- ・DX化について、来年度は定量分析を行い評価していく必要がある。文化施設の評価を目に見える形で定量化するのは難しいことではあるが、利用者の満足度・理解度や新たな意欲につながっているのかというようなことを分析できる方法を考え、福岡市科学館オリジナルの評価の方法を考えることも必要ではないかと議論もあったため、来年度追求していきたい。そして再来年度には実走するために、来年度で具体案の構築まで持っていくことができればと思っている。

板垣

8. 議長挨拶

- ・当会議ではビジョンの議論が多くなっているが、実際は福岡市科学館のスタッフが解決していかなければならない。良い提案や意見が多く上がっているが、それらをどのようにスタッフが具現化していくのかということが一番の課題。各分科会の検討テーマは、互いに関係が深い。場合によってはそれぞれの分科会の情報共有が必要だと思う。さらに、どの分科会にも共通することとして、福岡や福岡市科学館ならではの情報提供の在り方についての協議が行われていたが、福岡市や利用者の要望を今後福岡市科学館がどのように取り込んでいけるか、取り入れる努力をすることも重要だと感じた。

高安

#### 9.次回開催の連絡

- ・次回は2023年6月に実施予定。  
開館から5周年を迎え、一つの節目を迎えた。  
これまでの協議内容を活かしながら分科会の在り方を一旦リセットし、ゼロベースで構築をしていきたい。

吉武